

である。中学生の見学というので飛行服、身をかためた若い海軍士官が色々と説明してくれた。どんな話であつたか全く覚えていないが、私どもは、おこがれと好奇の眼とかがやかせながらこの士官の話を聞いたに違いない。いつ飛ぶかと、飛行機の飛び立つのを、今やおぼしと待っていたが、生憎と雨が降り出した。雨のをめ予定された飛行は出来ないと聞いて私どもはがっかりした。この当時は雨が降ると飛行機は飛ばさなかったらしい。午後になつて雨が止れたら飛ぶというので待つことにした。午前中で帰校する予定であつたので誰も辨当を持って来ていない。致し方なく白浜と竹ヶ谷の民家に頼んで甘藷をふかしてもらい、それと昼食にして午後を待たが、雨は益々ばげしくなり、とうとう飛行機は飛ばすまいに終り、私どもはわずぬれになつて帰つたのである。

私はこの後二三日して家のもの達と改めて白浜へ行くと、飛行機が爆音高く白波をけつて海面を滑走し、空に飛翔して行く光景を眼のおらりに見て心から満足した。

このことがあつて間もなく、毎年夏になると、聯合艦隊は佐伯湾をうづめつくし、飛行機は朝から晩まで絶えず佐伯湾上空を飛ぶようになった。昭和になつて佐伯海軍航空隊が設置され、飛行機と佐伯とは切っても切れな心深い縁が結ばれて昭和二十年の終戦まで続いたのである。この間に飛行機にかかある数多のエピソードがある。悲惨な話が次々と憶い出されてくる。

何はともあれ、現在の航空界は長足の進歩を遂げ、人智の及ぶ限りの科学の粋をおつめてゐるが、五十数年前、少年の頭好奇の眼で見た昔の飛行機のことを憶い浮かべると、まるで夢のようである。今更ながら今昔の感に堪えない。

(おわり)

研究

毛利高政の系譜について

佐 脇 貫

會員・佐伯市津志河内

叢祖從五位下民部大輔藤原朝臣高政后及伊勢守、氏森尾州之産也。其性貞悍雄偉。少而仕太閤秀吉公。天正十一年四月二十一日於江州志津殿、秀吉公與柴田勝家一戰時、遂敵挑戰自傷矣、其餘每臨軍無不得利也。同十五年賜豐之後州隈城及秋祿式方斛、文祿二年朝朝鮮征伐之時、從命為軍監在陣經年、始還兵於肥州名古屋謁秀吉公、公感賞其忠、欲而遣豐州日田、攻珠二郡吏之也。再涉朝鮮由南原之城陷之、且於水營之瀨先諸將與大羽番船忿擊而自採戈、追討敵兵、武成於異城、本邦秀吉公應賞勇猛而厚賜或書勳勳、慶長六年四月五日因未照宮之命、辭隈城而遷州州海部郡佐伯庄、築城於鶴屋居之。慶長十九年冬根州大坂陣之時、屬東照宮之命於備前島、京橋市中以計策悉有功、翌年夏再請開東御出馬之告而出帆於佐伯、五月七日到大坂拜謁東照宮、台德院殿、元和一歲之後世奉仕將軍家也。

寛永五戊辰年十一月十六日、於武陽卒春秋七十歲、年終外紹元。嗚呼大哉、高祖余烈以長壽子孫之後、我苟統箕裘慕之不歇、於茲新造立靈廟謹誌之。

宝永四丁亥年十一月十六日

從五位下周防守毛利氏藤原朝臣高政

これは養賢寺境内にある毛利家墓地の始祖高政廟記で

ある。六代周防守高次が宝永四年に靈廟を建立、記之墓前に掲げたもので、いわば毛利氏の遺徳を頌うかにしたものである。毛利家に保存されてゐる毛利氏系圖は、蒲祖高波の前代と高次、その先を政次として、彼高波が草芥の間に派生した家傳であることと明示してゐる。然し乍ら寛永重修諸家系譜の編纂にあつて、幕府の要求にこれとづいて提出された毛利氏系譜は六角佐々木氏の庶流、鯉江備前守定春の後として堂々たるものになつた。

養賢公諱曰高政尾張の人也。其地曰宇多天皇の第八皇子一品式部卿敦実親王の曾孫、左近將監成瀬の十四世備前守高久は出羽守藤原泰定、養子となり、近江鯉江莊に居る。是に於て姓を藤原と改め氏を鯉江となす。後備前守定春に至つて居と森村に移し、氏を森と有し、徽号に鶴北を用ひ、九郎左衛門尉高次に至つて尾張刈安郡に移り、(豊國公に事へ御寮所末森、古渡の三邑を食す。皆尾張愛知郡に属す。)瀬尾市を築り、永祿二年某月公開求那莊子莊花莊村に生まれ、幼は勘八郎と字す。或曰豊國公の孫長子と伝ふ。初め豊國公微なる時瀬尾小太郎と親善なり、その女を与へ公を生み、因つて偏諱を賜りて高政と命名す。(當時豊國公、木下藤吉郎高吉と稱す。)女後に森高次に嫁し、公母に從ひ適々森氏と冒すといふ。熱水が是なるを知らず。増村氏訳「鶴藩略史」

(註)刈安加、前安賀村、尾張國中島郡に在り、天正中微用信、誰の老臣、淺井田宮北の領したところ。

毛利養賢公高政、初勘八郎と稱す、後氏部大輔と改め、伊勢守に任ぜらる。又曰元永公高次、母曰元光夫人、瀬野尾小太郎の女にして上杉不識公の孫なり。毛利氏は先曰宇多天皇の皇子敦実親王の曾孫佐々木

成瀬に出ず。成瀬十四世の孫高次に至り、三井出羽守藤原泰定の養子となり、江洲廣福郡鯉江城に居り、氏を鯉江と改む。其子高昌足利義尚に事ふ。其子義堯子なきを以て三条大納言瑞春の子高次と養ひ嗣とす。其孫定春の時、鯉江城冠賊の爲め破られ、徙つて鯉江庄の内森村に居る。因つて姓を森と改む。定春豊國公に仕ふ。公より食邑を攝州に賜ふる。和親等詳細明らかならざ。定春卒し、其弟政次嗣ぐ。政次卒し高次嗣ぐ。之を元永公と云。更に尾州刈安郡に封ぜられ、從つてこれに居る、實に養賢公を生む。(豊後遺事、豊後全文)

佐伯藩祖行誓守高政公日本姓森氏なり。後毛利と改む。慶長六年辛丑八月(四月の謬りか)佐伯に御入回あらせらる。寛永五戊辰十一月十六日卒す。春秋七十三、治世二十八年。(鶴谷藏文・毛利家歴代)

毛利氏曰宇多天皇の皇子敦実親王の曾孫源儀法々木左近將監成瀬十四代佐々木四郎高次に至り、三井出羽守藤原泰定の養子と罷成候に付、藤原姓に改め、江洲渡智郡鯉江に城を築き本城と致し候に付、佐々木氏を相改め鯉江備前守高久と名乗申候。古源姓佐々木氏と藤原鯉江に相改め候始に御座候。且養家三井氏藤原姓の義以、何れも末流後胤と申候義一向相知申さず候。鯉江氏を森氏に改めたる日、天正元酉年、鯉江の居城没落後、同前鯉江の庄の内、森村に住居候に付森と改め候。森氏を毛利と改めたる日、勘八郎高次に至り、天正十年辛酉年秀吉毛利輝元が持備中同高松責入砌、織田信長、明智光秀の爲めに殺され、時に秀吉、輝元と和議に及び双方より人質と遣はるるに、勘八郎輝元より毛利と改むる旨勸めら

相改め候。

〔源姓知新録〕

以上私に毛利高政の家系に關する資料を三、四列記したが、いざれは毛利氏が依り藩上としての權威を高めるため、つくられた系譜で、藩祖靈廟記や毛利氏系圖のまゝに莫衷の毛利氏と語つていない。まづと徳川將軍家とほじめとして島津氏、蜂須賀氏、池田氏、前田氏など戦國時代から安土桃山期へ織豊時代に分けて功績した氏は、支配者としての權威を高める必要から古来の大族に結びつき、いわゆる源平藤橘の四姓も主体にする系圖をつくつた。へ註、前田氏は菅原氏を稱している。毛利氏か宇多源氏と稱したのは、本姓が森氏であつたからで、おそろく北郎左衛門高次が伝えられた家の伝承に、佐々木流總江氏の裔といふ言伝があつたものであろう。

文化三寅年、今度大坂綱島大長寺へ總江備前守定春公の御位牌、御安置仰付る水永世辭急なく御供養申す可き旨にて祠堂銀御納めこられた候。(略)

(御位牌裏書)

曩祖總江備前守源定春者其先出于宇多帝第八之皇子毅実親王天正年間住於根州故後世名其地謂備前島總江氏定春學後建立一刹号大長寺放獻文化三年寅夏四月再設神位以伝永世矣。

喬孫豊後国佐伯城主従五位下美濃守藤原朝臣毛利高朝奉祀

〔源姓知新録〕

毛利高政が初め森勘八郎高政と稱していたことは諸記録にも残つており、高政が森氏であることは疑うことの出来ない史実である。ところが問題が高政の森氏、つまり森九郎左衛門尉高次の系統で、伝承は宇多源氏佐々木

流、總江備前守定春の弟九郎左衛門高次が尾張下宿居して、豊太潤の家上となり、政次の跡をついだ末弟高

次の長男が勘八郎高政といふことになつてゐる。さて總江定春の總江氏であるが、これは近江国小倉庄總江城に拠つた六角佐々木滿綱の子高昌が名乗つた苗氏で、姓氏辭典によると滿綱の子が高久、その子が高昌で高昌は二代を縮めた名になつてゐる。高昌の子は義堯その養子が高定、この高定は三條大納言高定の子であるといふ。しかし三條家の系譜には大納言高定は藩翰譜に伝へるところによると、毛利高政の森氏は大納言長家(關白道長の子、御子左流といふ)の子忠家の後、近江滋賀郡三井郷に住む三井氏と稱した出羽守兼定の後で信堯といふ者に出ているとしてゐる。とす水六角佐々木滿綱は高昌の子で、高昌は足利三代将軍義高の弟である。なお大納言高定の名は御子左京極流の爲兼の裔に見られる。

高政の父高次が總江備前守定春の末弟であるとすれば、正しく堂々たる佐々木流森氏であるが、大日本地名辞典をいくら調べても總江森村の存在がわからぬ。高政が生まれたとすといふ尾張国關東郡荒子森村といふところは、關東郡が海軍部即ち海東郡であることとはわかるが、荒子森は海東郡になく、磯知郡荒子とて前田利家の出身地である。九郎左衛門高次の所領と伝へる御器所、末森、古渡は、これと織田氏の所領で、とくに末森は磯田信長の弟信行の城があつたとする。また古渡は信長の父信秀の隠居城があつたとする。少々くとも天正中期までは織田氏の直轄地であつた。そこで私は森高次が居住してゐたのは海東郡新家御森村ではないかと想像してゐる。高政が海東郡荒子へ家は磯知郡荒子で生まれたとすても高次の稱した森氏

は海東郡森村と称する森氏で、近江愛智郡鯉江から
来た宇多源氏佐々木流の森氏では無いはずである。森武
藏守長一（まが長可）森蘭丸長定などの森氏は美濃森氏
で、清和源氏義隆流だが、辰張森氏は清和源氏高季流と
称している。

高次、高次は森氏がこの辰張森氏の一族であるとするは
系譜上何の疑義も残ら無いが、毛利氏系図が宇多源氏
佐々木流鯉江氏の後を称し、家紋を鶴の丸とするところ
に疑義が生じてくる。鯉江城は六角満綱の三男高昌に出
ている小倉氏の居城で、こゝ一族に鯉江氏と森氏がある
か、家紋は角うち四目、または魚の丸、五三の桐など
である。鶴の丸紋は美濃森氏の本紋。（海鶴紋という）
なお満季流（辰張森氏）は根葉、根葉などを用いた。す
なわち高次は自ら森氏を名乗るところから、パツとしない
辰張森氏と避けて六角佐々木の庶流である鯉江森氏と
り、家紋に備用氏の宿将森長一の「鶴の丸」を使つたこ
ろではなからうか。

文祿元年秀吉朝舞征伐の時、公命を奉行に糾し出陣
の儀、船幕に付するに矢筈の紋を以てしるるに豊公
之を見て其故を問はる。公答ふるに母方の梶原氏子
孫なるより矢筈を用ゆる由を陳せしに秀吉然らば夫
筈を以て家紋と為すべき旨命じたり。（温故知新録）

これは毛利高次が矢筈紋を用いた由来をのべて古もの左
が、鶴の丸紋が借紋であるとすれば容易に改められる。
況んや森長一の跡は末弟忠政が嗣いで鶴紋の宗家になつ
ている。高次ならずとも自らの旗幟を明らかにしたいで
あらう。

或伝公建國公慶長子、初望國公徵時、与瀬尾小太郎
親善、其女生公、因賜偏諱命名高政、當時望公称
木下藤吉郎高吉、女後嫁森高次、公随母適冒森氏不
知孰是。（鶴藩略史）

毛利高次が豊臣秀吉の慶長子であつたといふ説は、鶴
藩略史が記述するところであるが、故佐藤鶴谷翁は、こ
の説は昔から伝えられたもので、あるとき高次公御自身
から家臣に語られたものといつていたが、若し翁の語
しが事實であれば、高次も秀吉任じたる人心收攬術を心
得ていたものといつてよい。

天正十年三月、公豊國公に従ひ、備中高松城を攻む。
毛利輝元これを援く、和成りて輝元乃ち季父元綱を
送りて質となし、豊國公は公を送りて之に答う。公
は尚に在るや、輝元その豪邁を愛し、一日従容とし
て謂ひて曰く、毛利と森とは邦音相近し、今我封内
五万石、予之を子に割かん。子能く我為めに封を支
へよと。公答へて曰く、我菜邑三千石を有す、饒は
くばその一半を分てば我能く家を支へんと、事遂に
諧せず。然して特に毛利に氏を更へる事を受く。
（曾村氏或鶴藩略史）

信長公、毛利輝元を攻め従へんとて、羽柴森前守に
仰せ付るに、中國に差遣はされ対潭の起、京都本能
寺にて明智光秀、信長公を弑し奉り候由告げ来たる。
依て毛利家と和睦の上、明智を討つ可しとて、使者
を以て中入られたり。然る上は互に人質を取替し、
和睦致すべしと輝元より是人質として小早川隆景と
差出し、秀吉公よりは森勘八を輝元に差遣はし、和
睦の上明智日向守光秀を討取りたり。其節輝元より

勘八に、森の首字を毛利と書替へ可すべき様との事
に付、毛利の武功にあやからんため、毛利勘八高政
と改め、其後臣部大輔高政と改めらる。

〔佐田秘説録〕

和議成立し、輝元、元春、隆景ら誓書を作り、我が
誓書と交換し、輝元の末弟元綱と元春次子経言の二
人質となる。(秀吉披露書に曰う)明智め討果中腹
に付、毛利一書並に血判、人質兩人送請取云々。

〔天正記「惟任退治記」〕

かくて城には杉原家次を入れ、其夜成刻忠家(一字喜
多)の軍を飯し、森高政を召し、夜半になり退却せ
ん。其方は残り毛利の挙動を監視せよ。京都の愛が
毛利に違するは速し、然れば毛利は誓書を破棄する
也と討られず。彼の誓書は変報に先んじて作られ
ればなり。若し敵陣に動搖あれば速に長堤を破れ、
河水氾濫して敵陣を包み、如何に焦燥するも一日、
二日は渡渉し得ず、山路は羊腸なり匍匐せざれば登
る能はず。一日に万騎を出し得ざるべし。明末刻ま
てに異変なければ束上せよ。云々置き、孝高に敵
を命じて五日五刻、退却を始めたり。

〔天正記「惟任退治記」〕

森勘八郎高政が毛利氏を称し古ことについて以羽柴秀
吉の中国征伐にあり、和議の人質として毛利方に遣ら
れ、輝元と義兄弟の約を交わして毛利氏に改めたものと
伝えられているが、秀吉方の人質として敵陣に遣られた
勘八郎、兵橋兄弟であるから秀吉の血縁者であらうとい
う推測が生まれ、秀吉庶子説の根柢にもなつた。兵橋吉
安が高政と共に毛利の陣に遣られたという伝承について
は徳川実記などに

高政もとは豊臣の家士九郎左衛門高次が子にて森勘
八郎といふ。天正十年六月羽柴と毛利輝元と和睦の
とき、高政は弟兵橋と共に毛利へ人質に参りけるに
しり云々

〔徳川実記〕

とあり、当時十才かといふ思おれる兵橋が采して高政(一
二十四才)と共に戦陣にあつたかどうか。また天正記(一
秀吉事記ともいふ)はこの和議にさいして秀吉方が人質
を出したことを記録しておらず、高政は秀吉の命によつ
て毛利方の働きを監視する左め蛙ヶ鼻の長堤に残留した
ことになつてゐる。高政が森の姓を毛利に改めたこと
については、同じく秀吉の旗本森勝信が毛利豊前守勝信と
称し、黒田長政の家臣母里太兵衛が毛利但馬と改め左
うに、当時は大族におよぶ姓を名乗るものが多かつた
ことを考へなければならぬ。また高政が真に秀吉の
庶子であるならば、毛利を称するより前に羽柴の姓を名
乗るはずである。高政は永禄二年の生れであるが、永禄
二年当時の秀吉はどのような身分、境遇であつたか。正
史の年譜をひらいて見よう。

○ 天文六年二月六日、屋張國愛知郡中村に生る。(関白任官記)

(父弥右衛門、母女か)

○ 天文二十三年(十八才)清洲城主織田上総介信長に
仕える。(小倉、草履取り)

○ 永禄三年(二十四才)小人頭に取立てらる。

○ 永禄四年(二十五才)足輕組頭となり、はじめは水
下藤吉郎秀吉と名乗る。足輕組頭浅野長勝の養女か

叔（杉原定利の子）を娶る。

○永祿五年（二十六才）士分下取立てらる。

○永祿九年（三十才）足輕七將に在る。

○元禄元年（三十四才）甚女（南殿といふ）に男子を
まませた。（石松丸と名付く。）

○天正元年（三十七才）長浜城主（十二万石）と在る。
羽柴の姓を名乗る。

○天正四年（四十才）石松丸羽柴秀勝死す。（本光朝
覚居士）長浜の妙法寺に葬る。

秀吉が信長に又とめられ小人頭（仲間）の長）になつた
の以永祿三年、桶狭間の戦があつた年である。永祿元年
二年当時の秀吉はまをせられと名をさされ仲間、小者で
あつた。一生懸命に走り使ひをし、草履取、鹿ノ掃除主
する奴であつた。とてい、瀬尾小太郎などといふ御士の
女と契るやうな境遇ではなく、まして木下藤吉郎高吉な
どと名乗れる身分ではなかつた。秀吉が正妻のおね（北
岐所）以外に女に手を出したのは、信長上洛の先手料
として江北に進出（姉川の戦）した元禄元年で、その後
（天正元年）長浜城主になつたとき、女（南殿）を城中に
よび愛妾第一号にした。以上の史実から高政の秀吉庶長
子説は伝承の誤謬であることがわかる。

さてここまで論述してきたものの、高政の系譜につい
ては結論を出せない。それは毛利氏系図が森政次以前と
記録してないからである。

（おわり）

資料考察

佐伯藩の四大井路

—その他、小田井堰頭首で完成まで—

山 本

会真・佐田市青山小学校

田植も終りました。先月号で高橋智氏が浜後井路（
本五村）について触れていましたので、私は小田、鬼が
瀬、常盤、高島の各井路（井堰）その他について一考察
を試みたいと思ひます。

まず、考察の手懸かりとして歴史年表を提示します。

年号	西曆	事	項
元禄	四一六九一	五代毛利高久の時、上野村小田井路完成。	
宝永	三一七〇六	六代高慶の時、中野村鬼ヶ瀬井路を築く。	
享保	六一七二一	小林九左衛門総奉行となり、五所明神社再建。	
〃	七一七二二	小林九左衛門死す。	
〃	一七一七三二	虫害甚しく、大阪より米一八〇石を買入れる。	
〃	一八一七三三	浜後井路完工。	
〃	一九一七三四	江戸に米一撥。	
寛保	二一七四二	幕府甘藷栽培を奨励す。	
天明	三一一七六六	女島沖洲と相襲し、水田四十二町歩余を得。	
〃	四一一七六七	二年より明和八年迄早魃、飢饉続出。	
〃	八一七七一	八代毛利高標の時、久部村に堰と開設す。	
天明	元一七八一	母子水洪水あり、疫癘流行し、髮劔難となる。	
〃	三一七八三	この年より天明八年迄大飢饉続き、餓死者多し。 （未曾有の凶作、銀羽の死者七万人に達する）	